

論文の内容の要旨

論文題目

教科書がつくる対外認識と国民意識
——「併合」期から戦後にいたる韓日の「国語」教育——

氏名

金 暁 美

本論文は、近代国民国家誕生以降、国民の精神形成において多大な影響を及ぼしたとされる「国語」教科書を研究対象に、その中に表われる対西洋認識を考察することで韓日で求められた国民像を探るものである。この問題への関心は、韓国と日本のナショナル・アイデンティティをどう理解するか、という観点から設定される。

「教科書問題」がしばしば国際的な争点となることに象徴されるように、人種、血統、言語、歴史、文化など、国民意識形成の根拠とされる諸要素のイメージ創出に、教育は核心的な役割を果たす。

本論文が研究対象とする「国語」科は、教育の基礎を成す統一した読み書き能力を養う教科として、「国民化」において核心的な機能を果たすものである。明治維新以降、日本では、欧米諸国に伍してゆける均一な国民を作る目的で、統一された「国語」への模索が始まった。1900年の教育課程改革に基づき、1904年から使用された第1次国定「国語」教科書『尋常小学読本』に至っては、国家の「国語」政策の方針及び目的が「東京の中流社会」に基準を定め、「国語」の統一を図る「標準語教育」にあることが明示される。「国語」は、1910年「韓国併合」を迎えると、植民地朝鮮にも進出し、「同化政策」の根幹をなす思想となった。

植民地統治下の朝鮮の教育は、1911年に発布された第1次朝鮮教育令によって本格的に始まったが、保護国期に編纂された『普通学校学徒用日語読本』（1907～1908年）から朝鮮第5期教科書『ヨミカタ』『よみかた』『初等国語』（1942～1945年）に至るまで、日本の教科書の教材との関連は濃厚である。

従来の研究は、授業料徴収や修業年限の短縮などの政策面における「排除」に対して、「同

化」政策の根幹となった「国語」教育の「包摂」の側面（小熊英二『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、1998年）、653頁）に集中的に光を当ててきた。その一方で、植民地教育における「西洋」を題材とする教材は、あまり注目されず、取り上げられる場合にも、排除される側面のみが言及されるに留まっていた。

それに対して、本論文は、植民地朝鮮の「国語」教科書に登場する西洋、ひいては世界像を提示する教材が、注意深く選択・改変され、提示されている点に注目する。植民地朝鮮の「国語」教科書の示す「西洋」を可視化し、テキストの「改変」の過程を追うことで、植民地権力が朝鮮においていかに「内地」とは異なる価値の秩序を創出しようとしたのかを実証的に検証する。

さらに、連合軍による占領、及び民主主義と資本主義に基づいた発展を経験する戦後韓国と日本において、「西洋」は指標とすべき「先進国」として機能し続けた。従って、戦後も韓日で同様の西洋の教材が採択された例は珍しくない。しかし、その具体的な採用部分や解釈には大きな差異がある。本論文は、植民地時代から戦後にかけての教科書を、共時的、及び通時的な視点から実証的に考察し、戦前と戦後の連続性、非連続性を確認することで、様々な歴史の転換を経た韓・日の人々のナショナル・アイデンティティの構造の一端を示したい。

研究対象の射程は、日本の義務教育の年限を基準に、戦前は、初等学校レベル（尋常小学校・普通学校）の文部省、及び朝鮮総督府編纂教科書を、また、戦後は、小学校・新制中学校の教科書に定める。時期的には、主に日本と朝鮮半島の教科書が密接に関わることになる1910年から、思想的転換と共に教育方針の再模索が図られ、現在の「国語」教育や教科書の基礎を成す第2次世界大戦後までとする。韓国については第1次教育課程が適用されていた1962年度まで、日本については、1947年と1951年版学習指導要領国語科編（試案）が適用されていた1960年度（小学校）、1961年度（中学校）までを検討する。

第1章では、まず、戦前の教科書における空間認識の性格を、教育政策と教科書編纂の方針の異同を中心に概観した上で、文部省と総督府教科書に採用され、内容の共通性が認められる「地球」（文部省『尋常小学読本』（1904年）8巻）と「世界」（朝鮮総督府『普通学校国語読本』（1912年）8巻）、さらには「航海の話」（文部省『尋常小学読本』（1904年）（7巻ほか）、朝鮮総督府『稿本 高等国語読本』（1912年）1巻ほか）などを比較分析し、世界認識を検討した。その結果、確認される「地球」や「世界」における教材内容と課の構成の差異、また「航海の話」における「海外」の範囲の違いは、「内地」の児童に「日本人」として世界に羽ばたく進取的な役割意識を求める一方で、植民地朝鮮の児童に対しては、「大日本帝国」の一部に属することを認識させることが最も重要視される、非対称的なものであったことが確認された。

第2章では、総督府編纂教科書に「転載採用」された「一人称視点」の紀行文形式の西洋地理教材「ヨーロッパの旅」の性格を、文部省編纂教科書における西洋地理教材に加え

て、「台北だより」、「ブラジルから」など、西洋以外の「海外」地理教材、さらに、「連絡船に乗った子の手紙」といった「内地」関連の地理教材の視点および語り方と合わせて分析した。「ヨーロッパの旅」(『尋常小学国語読本』(1918~1932年)12巻)は文部省編纂教科書において「国際協調」と「児童本位」の思潮の中で登場した一人称視点の教材であった。「朝鮮」の教科書においても「朝鮮人」児童の心理を考慮するといった編纂方針は掲げられるものの、一人称の視点の語りは、教材によって注意深く、選択的に適用されている。上記の教材の中で、『普通学校国語読本』の学習者であった「朝鮮人心理」と最も合致し、共感を呼ぶ朝鮮人の一人称の視点が用いられたのは、「内鮮融和」教材として分類された「連絡船に乗った子の手紙」(同7巻)のみであった。一方で文部省編纂教科書から転載採用された、「ヨーロッパの旅」は「朝鮮」が決して現出しないという特徴をもち、「朝鮮人」というアイデンティティをもつことと、国際的に活躍することが共存しない構造を示している。植民地朝鮮における「児童本位」はかえって総督府の意図する方向へと児童の思想を誘導する道具として使われたきらいが強い。

第3章では、「人物像」という観点から西洋題材教材の分析を行った。朝鮮の教科書に登場する西洋人物は、「ヨーロッパの旅」同様、1930年代の文脈の中で選択的に掲載され、その様相は志願兵制度(1938年)と「形影相伴」(宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』(未来社、1985年/1997年(第4刷))、156頁)って実施された第3次朝鮮教育令(1938年)に基づく教科書改訂によって変容し、さらに第4次朝鮮教育令(1941年)の下で編纂された国民学校教科書に至っては姿を消す。

「飛行機」(同11巻)や「野口英世」(同11巻)にみられる西洋人は、日中戦争前までは「標準的な文明」を代弁する存在として、「大和民族」の作り出す「日本文明」の優秀性を担保し、「大和民族への同化」の正当性の根拠として機能する。一方で、それ以降の教科書における二宮忠八の英雄化(前出「飛行機」(1938年改訂版))が示すように、「志願兵制度」(1938年)の実施とともに、変更された教科書においては「天皇のために命を捧げられるほどの国民的感動」の誘導を目標に、「世界一優秀」な「日本人」を強調し、「内地」という空間を標準的な文明にする世界認識の創出が目指されていたと考えられる。

さて、第4章では、「国家語」と愛国心を主題とするドーデの「最後の授業」を考察した。戦前日本の教材の翻訳で露呈したのは、複数の植民地を抱え、母語と異なる「国語」によって同化政策を進める日本「内地」の人々における、「国語」が母語に限定されることに一切疑いを持たない閉塞的な「国語」認識である。同作品は植民地朝鮮では採用されていない。

一方で、新聞紙面でみられる「最後の授業」の翻訳は、植民地朝鮮の人々が西洋の文学作品を、日本帝国主義を相対化し批判する視点として活用していた事例である。しかし、西洋の文学作品は、日本帝国主義の言語支配の暴力的側面を批判し、「朝鮮人」の民族的ナショナリズムを主張する根拠となった一方で、朝鮮人に「同化」を強要する論理であった、言語、民族、文化が結びつく思考の枠組みに疑問を投げかけるものではなかった。戦前の

日本及び植民地朝鮮に形成されたこのような思考の枠組みと言語認識は、人々の中に深く内面化され、模倣や反復される形で戦後にも続いていく。

第5章においては、「新しい時代」の国際認識に見合うものとして両国で共通して繰り返し使用された「キュリー夫人伝」の分析を通して戦後の国際的視野を検討した。

日本の教材における、ポーランドの植民地支配の状況に対する関心の薄さなどから、戦後で大きく叫ばれた「国際的視野」や「平和」には、旧植民地支配に対する責任の問題は入ってこない、という隠れた前提が見えてきた。また、多くの教材が、帝国主義批判と緊密に結びついたキュリー夫人の愛国心を、その文脈から切り離して、日本の児童に「国語愛」や「愛国心」を強調する教材として編集されているという一種のねじれが確認された。

日本とは対照的に、韓国の教科書に戦後長い間採用されることになる教材「憂鬱な時節」は、36年間韓国で実際に実施されていた、日本語による「同化政策」を連想させるものである。この教材は、韓国の戦後の「国語」教育観と共に、対日認識教育の一端を示している。しかし、この教材はあくまで自国の独立や自由を主張するために使用されており、あらゆる暴力や戦争の否定、という本質を見据える視点が欠落していた限界を持つ。

以上の検討の結果、明らかにされたのは、両国において西洋に対する認識がナショナル・アイデンティティと深く結びつき、相互に対する認識を決定していく構造である。両国において「西洋」は、戦前には植民地支配を正当化、または批判する論拠となり、戦後においても、「国際的視野」の拠り所として機能する、対外認識と国民意識の形成に重要な要素となったのである。

本論文は、従来の植民地教科書の研究においてはあまり注目されなかったテキスト分析の手法を導入したことで、文部省編纂と朝鮮総督府編纂教科書が同様の教材や人物を採用した場合でも、その重点の置き方や文脈の違いによって、異なる価値を創出しようとした様相を実証的に検証した。その一方で、本論文は、戦後の両国の西洋文学教材を比較考察することで、一義的に解釈・提示されたそれらの作品が、閉鎖的な対外認識の形成に影響を及ぼす可能性を提示した。しかし、共感力や想像力を育て、人格形成に深い影響を与える文学教材にこそ、他者に対する理解や平和的に「共生」するための意識を育てる、大いなる可能性が秘められていると考えられる。このような可能性に注目し、文学教材の再検討がなされることを大いに期待したい。

学校教育に使われる教科書は、今もなお正当化された知識として、こどもたちの精神形成に深く根を下ろす強力な装置として機能し続けている。本論文で論じた、戦前・戦後の教科書でいかなる教材が提示され、それがこどもたちの対外認識と自己認識にどのような影響を与えたかについての検討は、韓日のナショナル・アイデンティティの構造を理解する上で、重要なテーマの1つになると思われる。そしてそれは、平和や国際理解を考える上での「国語」教材の役割、というより広い文脈からの考察を、今後さらに可能にしていけば好ましい。